
だれもないまひるのゆうえんち

井戸ノくらぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だれもいないまひるのゆうえんち

【Nコード】

N6578X

【作者名】

井戸ノくらぼ

【あらすじ】

以前応募した近未来戯曲の小説版です。自分の創作サイトにても発表済み。

どこにも行きたくないけど、どこかに行ってしまいたい。
そう思って、あの日、彼等はこの世の果てを探す旅に出た。

そして今日、彼はこの星に帰って来る。

廃園間近の遊園地に重なる、少年たちの季節。

プロローグ（前書き）

はじめまして、お目汚し失礼します。

元は中学時代に書いたものなので、至らないところが多いですが、日の目を見れないのは可哀想なので初投稿してみました。

BL風の近未来SFです。

萩尾望都氏の漫画の影響が出ていると思います。

プロローグ

その遊園地は、とある星の小さな海辺の町にあった。彼の生まれた、取り立てるほどのものなどない町でただ一つ有名な、いや有名な「だった」ものだ。

彼はその町が嫌いだった。もしかしたら世界自体が彼にとっては取り立てるようなものではなかったのかも知れないが、どちらにしてもそれは子供だったからだろう。本当は、今も大して変わってはいない。

第三セクターの名の下、狭い埋め立て地に十二年前に建設された、不似合いな程馬鹿でかい観覧車のあるその遊園地は、完成当時の人氣も次第に失せ、ついに一年前に消えた。殆ど無人同然の公園になっている今となっては、観光名所どころか、都市再生の夢の跡ではない。

だが、彼は五年前のあの日、その誰もいない真昼の遊園地に、懐かしいような既視感《デジャヴ》を覚えたのだ。

遙か昔のことだが、彼等がどのような経路を辿って大人になったのかを語るには、あの日無くしてはできないだろうと僕は思う。

人生を最初からやり直す事は不可能だ。誰もがそれを知りながら、あの日に戻りたいと願う。

人間は変わる。その変化を止める事はできない。

だが、いつまでも変わらないものもある。

思い出は滲む。そして消えていく。

だが、どうやっても消えないものもある。

それが強いものなら強いものである程。

哀しいものなら哀しいものである程。

それらを引きずって生きていくには彼等は若すぎる。

過ぎた日の美しさ、きらめきは忘れるには鮮明すぎる。

あの日から僕は考えている。三年前、彼等がまだ子供だった頃の事を、ずっと。

どこにも行きたくないけど、どこかに行ってしまいたい。
そう思って、あの日、彼等はこの世の果てを探す旅に出たのだ。

そして今日、彼はこの星に帰って来る。

あの日の序章《はじまり》。

夏の日の放課後、職員室に並んで立たされ、彼等は担任の教師に説教を喰らっていた。

「ジョシュア！ ギイ！ 璋《しょう》！ 何回言ったら分かるんだお前等は！」

「…先生のその怒りの皺が三十二本になるまで。これがほんとのシワ三十二、なんちゃって」

ギイはにかつと歯を見せた。

「寒っ！」

横を向いていた璋の苦笑。教師には聞こえなかったようだ。

「ギイッ！ 巫山戯たことを言うなッ！」

ついこんな当て字をしてしまうほど教師の怒り方は真剣だった。

まあ彼だって今の洒落には付き合う気がしなかったのだが。

「僕達が、何したってんですか」

彼はしれつと言った。

「何した、だど?! 授業はサボるわ、学校の備品は盗むわ、挙句に教師をノイローゼに追い込んで、これで何もしていませんと言えるのか!！」

「授業は、腹が痛くなって保健室行ってたんです。メイ先生にだってただ処女かどうか訊いただけで…」

ちょっと黙らせたかっただけなのに、あの女。

「ジョシュアッ！ とぼけるのもいい加減にしろ！ 三人も一遍に腹が痛くなる訳がないだろう?! 人を馬鹿にして、全く、お前達は首席を争う成績で入学してきた特待生じゃないか！ このままだどご両親に連絡して…」

「そんなに邪魔ならさっさと追い出しゃいいだろ」

璋が低く呟いた。

「璋ッ！お前は、女のくせにもっと丁寧な言葉が使えんのか！！その言い草はなんだ！？お前のご両親は、お前の為にこの学校《ギムナジウム》にお前を入れたんだぞ！？少しは感謝を……」

「まだ女かどうか判んねえんだから、どういう風に喋ろうが、あなたの知った事じゃないね」

教師はぐっと詰まった。勢いだけは体育会系なくせに、おつむは弱いつたら。少し強気に出るとすぐこうだ。

あんたこそなんでこの学校にいるんだって感じだよな。彼はひとりごちた。

璋は、現在でもまだ珍しい、試験管で生まれた人工授精ベビーだ。だが性染色体欠損とやらで性別の判定が難しかったため（外見は今のところ少女と見紛うばかりだ）、どちらの性別になっても大丈夫のように科目選択制で共学のここに来たのだという話だった。

しかし彼の口の利き方は既に男だし、彼もギイも絶対やつは男だと言い張っているのだが……。

璋とギイに出会ったのは、二年前の秋の入学式——ギムナジウムの新学期は九月に始まる——だった。首席合格だった彼（今でもある冗談じゃないかと思う）が壇上で新入生代表の挨拶をしている時、璋は隣の席の奴を泣かせていたし、ギイは一番前の席で気持ち良さそうに眠っていた。

勿論、彼もこんな事下らなくてたまらなかったし、何よりその場から出て行ってしまいたかったのだ。

彼等がここの堅苦しい顔たちの中でお互いを見つけ出すのに時間は要らなかった。そして、その瞬間から、彼等の、恋でも友情でもない正体不明の透明な何かが始まったのだ。

彼等はいつも教師の手を焼かせた。校長が朝礼で遅刻が減ったと言えば、学校のチャームをわざと遅らせて、それに合わせてやって来る連中を混乱させ自分たちは昼に登校したりもした。少しご年配の教師に教科の変更があったと偽の連絡をして自習時間を作り出すのは常套だった。

理系のギイに文系の彼、文理共通選択の璋と、一緒の教室で授業を受けることは少なかったが、こと悪事に関しては何をするのも一緒の三人だった（特にこの件は結局、誰の仕業か判らずじまいになっている。喜んだ奴もかなりいたからだ）。

しかしいつもはこんな風に学校で一緒にいることは珍しい。この体育教師がうっかり彼等をまとめて呼びつけてしまったのだ。普段は三人が集まらないよう学校も工夫している、らしい。成績は常に上位だが問題行動の多い、要注意の生徒と認識されているわけだ。それも実際無駄な抵抗だとは思う。顔を合わせなくても、連絡手段はいくらでもあるのだから。

彼等は、延々と続く、教師の途切れ無いお小言に飽き飽きしていた。

「そろそろ部活始まるんでこれで…」

ギイは慇懃な笑みを浮かべて言い、三人とも一斉に教室を飛び出した。まったく、いつまでも付き合ってる訳には行かないんだよっ。教師はまだ何か喚いていたが、もう彼等の耳には入らなかった。

彼等はサッカー部に所属している。校則で大概何かのクラブに入る事になっているのだ。

小さい頃からサッカーをしているギイは、流石に大所帯のクラブ内でいつも一軍だ。

璋も運動神経と呑み込みがいいので体育全般はすべてこなしている。けれど何故か一時間も経つとすぐにへばってしまう。笑う時も

そうだ。金切り声ともつかぬ乾いた声でひとしきり笑ったあと、ひきつけを起こして目を潤ませながら胸（注…もちろん平たい）を押さえながらもがいている。

いつか彼は、なんでそんなにしてまで笑うのかと璋に訊いたことがある。そうしてでも笑った方が気分が良くなるのだそうだ。「生きている感じがするっていうか」。よくわからない。

キーパーばかりやりたがる彼については…まあ可もなく不可もなく、とだけ言っておこう。

彼等がグラウンドに走って行くと、顧問の教師が待っていた。他の教師達とは違っていつも自然体で友達のように話し掛けてくる。それでいて、変に馴れ馴れしくない。

「どうしたんだ、いつもなら張り切って一番に出て来るのに」

「ちょっとヤボ用」

彼は笑って誤魔化した。

「また何かやらかしたのか、悪さも大概にしるよ」

「ヤバくならない程度にするよ」

ギイが歯を見せて笑いながら屈託無く言った。

こいつはいつもそんな調子で、彼のことを好きだと公言して憚らない。そう言えばやつはゲイになるのだろうか？ギイにかかれば人類みな兄弟というか、おそらくネタだとは思うが。

他の連中は、既に着替えてボールを蹴っている。あの連中とは彼は馬が合わない。適当に話はするが、決して本心を見せてはいない。やつらとは異質なのだ。脳味噌が凍り付いている。すべてが幼稚で、原始的で、あらゆる箇所に野蛮さが鏤められている。そのうえ奴らの笑い方は卑猥だ。馬のような、オランウータンのような声で笑う。

このギムナジウムでは初等部からの持ち上がりの連中が大半で、彼等のような中等部からの入学は大変難しく、人数も少ない。で、そのエスカレーター組は大抵が大金持ちの、頭は比較的悪い（これ

はかなり優しい表現に類する）ボンボンであったりするわけだ。まあ、向こうだってこっちを気に入らないんだろうからお互い様だ。でも彼はサッカーは好きだから、それはそれでいい。

彼等は駆けていき、時間が過ぎた。

ゆつくりと、彼等を呑みこんだシストラムは流れる。不愉快な揺れもなく、滑る獣のように。閑静な町中を走る、小さなりニアモーターカーのようなもので、家から学校まで三十分、彼等の通学機関だ。

二十一世紀も半ばを過ぎ、人類はまた少し進歩した。そして彼等は魔法も伝説も信じない、かさかさした子供に育っていた。埋蔵金という埋蔵金、資源はすべて掘り返され、果てしなく遠い宇宙まで開拓した人間に、夢というものはや存在しなくなっていた。どこか遠くの星では戦争が起きていたらしい。

それでもとにかく（しかも相変わらず）、目先の進路——良い大学に通い、良い企業に就職し、貞節な伴侶と理想の家庭を築いていくことだけが、ちょうど彼等のように、地球から少し離れた環境の良いコロニー惑星にだけ存在する、中流以上の家庭の子息、ギムナジウム生たちの典型的な将来パターンだった。

この頃の彼は、一刻も早く独立したかった。

長男ではなかったし、第一両親の面倒を看るのは御免だった。別に、彼がこんな風になってしまったのは家庭のせいだけではないということは、自分でも解っているつもりだった。

だが、しなびたこの小さな町の空気は、彼の心をも無感動に変えてしまっていた。

シストラムは、商店街の駅に停車した。八時を回ったビアガーデンは、そろそろ大人達を迎え入れるためにライトアップが始まっていた。

既にアルコールをしたたかに吸収したらしい、背広姿の男たちが管を巻きながら降りていく。

「おれたちもいつかあそこへ溜まるようになるのかなあ」

男たちを見送ると、ギイがハンバーガーに食い付きながら呟いた。
「お前なら、もう少しいいところで飲んでるさ」

璋がさりげなく答えた。

奨学金制度のあるギムナジウム生には珍しい話ではないが、彼には父親がいない。誰なのかも判らないのだ。

もしかしたら、えらい政府の高官かも知れないと彼等はひそかにワクワクしたものだ。夜の仕事をしてギイを一人で育てている彼の母親には一度だけ会ったことがある。おっとりとした優しいひとで、本当はきつと男に騙されたのだと思う。しかし、たった一人の息子をそれこそ目に入れても痛くない程かわいがっていた。

動き出したシストラムは、しばらくして草の生えた広い空地の前に停まった。ここにももうすぐでつかいビルが林立するようになるのだろう。空を覆い尽くす程に。

彼の胸を、虚しさが草食恐竜の首のように突き上げた。ギイは無言で席を立つと、そのまま降りて行った。母親は仕事に出かけたに違いない。

彼等の間にさよならは無しだ。何も言わずにそこを去る。そう言い出したのは璋だった。理由は教えてくれなかったが、彼とギイは同意した。

彼が降りる駅まで、璋とは少ししか口を利かない。いつもそうだった。

そして彼が降りるときも、挨拶は、あのゲームみたいなキスだけ。璋は彼に口づける。唇と唇が触れ合う程度に、しかし熱っぽく。軽く舌を入れてくることさえある（傍目には恋人同士に見えるのかもしれない）。そうしたらシストラムは唸りながら横腹の氣門を開きき、彼を外に押し出す。そして何も言わず、そのまま乗って行って夜の闇に消えてしまう。

家までの中途を歩きながら、先程の璋の行為を思い返して彼は体

の芯がひそかに熱くなるのを感じた。

璋はいつも彼をそうさせる。まるで弄ばれているようだった。だが彼は何も感じないふりをした。実際は璋を抱きしめて、それ以上の行為に及んでしまう衝動に駆られるほどなのに。璋だって別に誘惑しているつもりではないのだろう。

あれはギイには内緒の遊戯だった。どちらが誘惑に負けるか。

後ろめたさは感じなかった。璋の口づけがなくなることを恐れはしていたけれど。

頬までも火照ってくるのを感じながら、彼は家の門をくぐった。

彼はいつも璋がああ獣の中に住んでいるような気がしていた。実は住所も知らない。

家については彼もギイもあまり話したがらなかった。そんな事はどうでもよかったのだ。

ただ、お互いの存在を欲していただけだったから。

孤独には慣れている筈だった。

でも、側に解ってくれる人間を探さずやってゆけるほど彼等は強くもなかったのだと思う。

彼の両親は、これまた双方とも裕福な家庭出身のエリートで、子供もそんな風にならないと気がすまなかったらしい。

彼はさっきも言ったように末っ子なので、それほどプレッシャーは感じていない：なんて訳がない。彼は兄弟の仲で一番出来が悪いのだ。

彼は勉強に大した興味は持っていなかった。いや、別に興味があるものもなかったわけじゃない。でも彼の母はこう言う、『学校で勉強する事は将来役に立つ基本的な事よ。ジョシュは大丈夫よね』。そうやって実にさっくりと彼は追い立てられるのだ。

なにが基本だ。役に立つなんて、社会の歯車の一つになる為のものでしかないんじゃないのか？そして、いつか古い朽ち果てて捨てられてしまうんだ：。

彼の呟きは、誰にも届かないままいつも中空を彷徨う。

おかえりの声を確認もせず『ただいま』も言わず、玄関から上がった自室に鍵をかけて、自分の行為に没頭することにした。

璋のキスの感触、そのリピート再生だけで彼の妄想は白い炎を上げて燃える。

声を殺して、彼は宇宙までの小旅行を終えた。

気づくと学校の復習時間を告げるアラームはとくに鳴っていた。慌ててデスクパソコンに向かう。三十分遅刻してしまった。

二十一世紀の勉強は、ノートもペンも要らない。学校でインプットされた情報を家に帰ってネットから引き出し、その日の復習や翌日の予習に使うのだ。それはやはりネットを通して復習担当の教師のコンピュータに繋がり、成績に反映される。

この制度のために、近代の重要な産業の一つにもなっていた塾という機関はすべて学校に吸収されてしまった。子供達が夜の街を徘徊しないようになり、とても健全な体制として大人たちにはすこぶる評判がよい。

もつとも、授業料は義務教育からも有料になり、経済事情から学校に行けない子供たちというのも出てきて、二極化が進行してしまっている、というのが現状だった。

彼はこのシステムを非常に嫌っていた。一日中机の前に立って監視されているのと、なんら変わりがない。だから彼は、殆どの授業を受けていなかった。いや、受けなかった。

その気になれば、家に優秀な兄姉の使った参考書ディスクが五万とある。退屈な授業以上にたくさんの事柄がインプットされていて効率良かった。大体、成績のための勉強なんて効率よくやらずにできるわけがない。ひたすら要領よく、それだけだ。実力なんてものではない。

だが、そこまでしてなんの意味があるのだろうか。

彼は段々自分を見失い始めていた。

それに、彼はニセモノの優等生だ、なぜなら――……。

メールが届いていた。チャットルームへの呼び出し。

液晶つきのゴーグルとイヤホンをつなぎ、ネットの海をくぐって仮想のスペースに行く。放課後会うことを許されない彼等の唯一の“溜まり場”だ。ギイも璋もとつくに來ていた。

「よお」

仮想空間特有の、少しくぐもったふわふわした声でギイが手を上げた。映像はカメラが写した本人で、背景だけがバーチャルなのだ。とはいえゴーグルをかけた者同士で話すのは未だになんだか笑えてしまう。

話題は次の悪事についてだった。どうやってあの体育教師に仕返

しするか。こういう話は時間が経つのも忘れてしまうほど楽しい。

一段落して、璋が突然言った。

「なあなあ、ところで、サンピーってなに」

「は？何言ってるんだよいきなり」

ギイが笑い出した。

「3Pってのはあれだろ、な、ジョシュ」

こちらに向けた眼だけが困っている。

彼も困ってしまった。なんというか、そういう話題について璋と話すのはどこか微妙な気がして避けていたのだ。

多分ギイは既に彼と同じように思春期に特有な下半身の悩みを抱えているだろうが、男とも女とも決まっていない璋にはそんなことはわからなかっただろう。

「3Pってのは、あれだ、スリーパーソング、つまり三人ってことだよ」

ようやく言った。

「へー、よく知ってんなあ。でも三人って何の…」

彼は追及を避けるために先を続けた。

「で、なんでそんなこと聞くんだよ」

「いや別に、雑誌に書いてあっただけ」

「どういう雑誌だよ、コドモがそんなの読んじゃだめなんだぞ」

ギイが茶化した。

「誰がコドモだ、ああ？」

璋が睨み返す。

そのまま二人の喧嘩となり、璋は不貞腐れてチャットルームを出て行った。

「璋、なんとなくだけどそういう、男とか女とか意識し始めたんじゃないかな」

二人つきりになって、ギイが言った。

「さっきも言ってたんだ、多分自分は女になるんじゃないかって。『時々自分の中に女の部分がある気がする、それが邪魔になる』って。女は好きにならないだろうって言うから、じゃあお前もゲイだなんて言ったらオレはノーマルだ、って言われちゃったよ」

ギイは肩をすくめた。

「どっちでも、俺はかまわないよ。男でも女でも。お前が女だったら、璋より先に惚れてた確率は高いけど」

「じゃあおれ、今から女になるよ。ジュヌビエーヴって呼んで」

ギイが裏返った声を出し、彼も笑った。しばらく馬鹿話をした後彼は現実に戻った。

どっちが現実だったんだか。

彼は一息ついてパソコンをシャットダウンした、と同時に電話が鳴った。彼の部屋にある子機は親機が通話中であることを示した。母さん、今日は家に居たんだな。

でも、この時間に鳴る電話なんて珍しい。父はいつも十時に帰宅するし、兄も姉も大学の近くに下宿しているからだ。

なんとなく気にかかったので、親機のランプが消えると彼は階下に降りてみることにした。

「今の電話、何」

背を見せて突っ立っていた母親は振り向いて、それから慌てて笑顔を作った。

「あらジョシユア、もう帰ってたの、ただいまは言った？」

「言ったよ」

勿論嘘だ。ただでさえ彼は会話をしない子供なのだ。

「そう？聞こえなかったわよ」

本当はただいまをちゃんと言うことの方が基本的なことじゃないのか？言わない自分は棚に上げているけど。

「電話、」

もう一度彼は言った。

「あつ、別に大した事じゃないのよ、もうじき夕飯出来るから降りてらっしゃい」

「…そう」

彼は母の眼に動揺を見たが、何も言う気はなかった。もしそれが母の不倫相手からだとしても、彼に関することでない限り、どうということはない。それはまさに、彼が家族に対する情を無くした証拠だった。

彼は冷蔵庫から牛乳を出し、コップに注いで飲み干した。

彼が同級生の誰かの死を知ったのは、翌日だった。

向かいのクラスの生徒が自宅の裏庭で首を吊ったというニュースを聞いたのは、翌朝学校に着いた時だった。校門にはマスコミが集まり、いつもは埃っぽくてじめじめしている吹き抜けの校内が一変して、花の香りと生徒どもの黄色い好奇心で満ち溢れていた。

授業は漢字部首の「くにがまえ」のような校舎の中を、習熟レベル毎に教室移動するのだが、急遽全校集会に変更になり、全員が一階部分の講堂に集められた。

教師が入ってくるまで講堂は騒然としていた。噂話に興じる者、モバイルからテレビ回線に侵入する者、携帯テレビをプロジェクターに繋いで写した壁の映像にかじりつく者。

どのチャンネルでもこの話題でもちきりになっている。彼もギイが来て別の話を始めるまでは何となく見ていた。

みんな何かに飢えている。そういう意味では彼もまた同類かもしれない。

璋は我関セズ、とばかり眠っていた。

死んだ生徒は都会からの転入生だった。見るからに弱そうで幼い少年を、誰もが異質なものだと思っていた。大人たちだけはそれを知らない。

四枚にわたる遺書が残っており、そこには成績ばかりに拘る両親に詫びた文、そしてに危害を加えた者たちの名前が記されてあったそう。

実を言えば、彼もその転校生を嫌っていた。おどおどした眼、小さく丸い背中、聞き取るのが困難な細い声など総てにムカついていた。一度だけ委員会の時に少し話をした事があったが、それ以来なのか見かける度に何故か無性に腹が立った。殴られているのを見て

も止めはしなかったし（それは誰もがそうだったからとは言えないが）、あまりに機嫌が悪かった日には悪態をつく者に混じって蹴飛ばしたこともあったほどだ。

そんな訳で彼の名前が載っていても当然だと思った。だが庇えなかった者、それすらも同罪だ。しかしそうなるとこれは学年全体の連帯責任にもなり、さすがに学校全体にまで捜査が及ぶことはないだろう。

結局真実は隠れてしまう。

「命は大切でありそれを粗末にするのは誠に遺憾である」、と一行でまとめればいいような校長の話が終わると、教室に戻ることになった。臨時ホームルームで、担任のガリガリ（細いのとガリ勉をかけている、この学校の卒業生らしい）はいささか情に走り過ぎた校長の話に事実を補足するように話し始めた。

数人が金を脅し取っていたことが明らかになった。金額は会社員の給料3ヶ月分を軽く超えていたそうだ。さすがにこいつは彼も知らなかったことだ。

本当に莫迦なやつら。彼の嘆息は短かった。後で知った事だが、名前のあった“容疑者”たちは、事情聴取のため休みだった。残りの生徒もきつと誰も、自分が悪いとは思わないだろう。リストにさえ載らなければいい、載ることへの怖れさえない（だってそれは『みんなやっていた』ことだから）、群集心理の恐ろしさ。それがきつとこんな事を惹起するのだ。

はるか昔に“いじめは犯罪”と少年法で認定され罰則が何度改定されても、結局一部の者だけが罪を負って、真実は藪の中に消えていくだけだ。

いつも誰か生贄を求めている、ここはそういう世界だから。

みんな異常だ。

教師の話が淡々と進む中、彼はそっと回廊越しに、向かいの教室の机上の花を見た。

告別式は次の日で、小雨が降っていた。彼等はクラスの代表として葬儀へ行くことになった。なんのことはない、選考は成績順だ。なんだかこういう時は貧乏籤を引いた気分になる。

彼の名前は幸いというべきか、リストには結局載っていないかった。安堵の溜息のような、からっぽの空気が体から抜けていった。でも、遺族は本当は知っているのかもしれない。

凝縮された緊張と不安に、どうにでもなっちまえ、と彼は口の中で呟いた。どうせみな共犯だったのだから。彼にリストに載っている者を断罪する権利はない。実際逮捕されたとしても、今のところ彼には潰えるだろう未来も特にない。

その家はなかなか立派な家だった。両親と祖母と暮らしていたらしい。全員、どこかあの少年に似ていた。でも誰も何も彼に言わなかった。彼も言うべき言葉を持ち合わせていなかったの、それをそのまま述べた。

「この度は、何と言えはいいのか……」

ギイはきちんと頭を下げ、

「本当にご愁傷様で……」

そうか。そうやって言えはいいんだな。彼は感心して聞き入っていた。やっぱりこいつは一番大人なんだ。

遺影は入学式の時のものだった。制服の詰襟をきちんと留めた転校生は、緊張した面持ちでそれでも気弱そうな笑みを浮かべていた。性格が出ているな、と彼はぼつり思った。

璋はこういう場所は嫌いだと言って、いくら説得しても門の前から一步も動こうとしなかった。まあ、普段も彼とギイぐらいしか口を利かない璋としては、顔さえ覚えてない同級生の葬式に出る義理はないのかもしれない。

思った通り女子クラスの連中は皆泣いていた。あとで璋は『芝居

臭くて気持ち悪い』と吐き捨てるように言った。確かに、あの中には転校生と喋るところか、避けていた女生徒が何人もいるのを彼は知っていた。

帰り際、彼は呼び止められた。転校生の祖母だった。

「あの子が、お世話になったそうで、仲良くしていただいて、ありがとうございます」

小さな体を折り曲げて、ますます小さくなっている。

何か、思い出しそうな気配があった。

だがそれは、他の何かも思い出してしまいそうな気がして、彼はあまり嬉しいことでもなかった。

「人違いです、失礼します」

彼は足早に去った。まだ何か言いたげなその老女を残して。

その帰り、シストラムの『胃袋』の中で彼等はいつもより明るい空を、飽きもせずただ眺めていた。

「さっきのあれ、何だったんだ？ ジョシユ何かしたのか？」

ギイに訊かれても、彼はこう答えるしかなかった。

「…知らんね」

午後からは授業があったのだが、学校にはもう戻らなかった。

途中寄ったゲームセンターで、不意に璋が口を開いた。

「あいつ…、あの死んだやつさあ、何処に行ったんだ？ 天国か？」

「さあな」

彼はなるべく短く答えた。あまり考えたくなかったのだ。

「どうなっちまったんだろうな、横田のやつ」

ギイがそう言った時、やっと彼はあの死んだ生徒の名を思い出した。今までその横田の家に居たのに、写真の顔ばかり見つめていて何故か頭の中に入ってこなかったのだ。

「まあ、行けるように祈っててやろうぜ、もう死んじやった奴と話すことなんてできないし、自殺したから地獄行きなんて可哀想すぎだし」

ギイはやっぱり優しい。「さっすがクリスチャン」と璋に茶化されても怒らない、その宗派を確定するのは極めて怪しいが。

いつか彼が怒りにまかせて横田を非道く殴りつけそうになった時にも諫めたのはギイだった。横田だって、ギイには好意を持っただろう。

「そりゃあ人類みな兄弟、神を愛するごとくジョシユも愛してるのさ」というのがギイの口癖だが、でも実際、男から好きと言われるのは彼自身にとってはあまり嬉しいことではない。

ギイは何故こんな彼を好きになったのだろう。しかも彼は璋が好

きなのだ。どんなに璋が女性に変化することを願っているか。

しかしその反面、いつまでも変わらずに三人でいたいという気持ちも存分にあった。璋自身の気持ちは掴めないが、今のままだが最高だと思っていた。

おかしな三角関係。ちょっとばかり厄介な、でもいい関係だった。

「昨日電話あったか？担任から」

彼は二人に訊いてみた。

「なかったよ。ニュース見るまで知らなかった。璋のところは？」

「寝てたからな、よく分からない」

「寝てた？まだ7時ぐらいだぜ？」

「十時間睡眠でなきゃ体がもたないんだよ」

このように、いつも璋には謎がつきまといっている。

ギイと別れ璋と例の儀式をした後、彼は死んだ横田のことを考えながら家に帰った。

自殺、か。

彼は何度、TVの画面に映し出された横田の遺言を、いまどき珍しく紙に自筆で書かれたその文章を冷たい感情の底で笑っただろう。甘っちょろいヘタレ野郎、どうせ死ぬならあいつら道連れにするとかの方がまだマシだろ？そういうとこだけ勇気出してどうするんだよ。

なんで自分の方が簡単に殺せちゃうんだかな。他人の命と自分の命を比べてさえないんだから。

いや、他人の命と同じくらい自分の命だって大切なんだから。

そこまで考えて彼はふと気づいた。

横田には、そういう事さえ言ってくれる人間すら居なかったのだ。そして、もう自分がこんな軽口を叩くことさえできないというこ

とも。

死ぬ気でやれば何でもできるなんていうのは嘘だ。死ぬ気になる
っていうことは、ほんとに死ぬことしかできなくなった時だからだ。
それはほんとに、死ぬこと以外、何も考えられなくなった時な
だ。

彼は突然泣き出しそうになった。泣いて泣いて泣きまくって、自
分というものをからっぽにしてしまいたかった。

今の僕にもその気持ちを理解するのは至極簡単だったのだと思う。

次の朝、シュレッダーの中、通信販売のDMにそれは交ざっていた。彼宛の手紙。途中で刃が引っかったのか、そのままの状態である。

取り出して彼は一瞬ぎくりとした。今朝のニュースでも流れていた、横田の遺書と同じ封筒と字だ。

きつと死ぬ前に投函したのだろうが、うちに届いたのは昨日か、それとも今朝早くだったのか…。

封は開いていた。彼はそれを読み始めた。

何が大だか解らなかった。手紙の主は彼のことを偶像のように頻りに賞賛していた。委員会で話したこととか、ずっと憧れていたのか…。

この僕に憧れてただって？ どうしてなんだ？！ だって、あんなに非道いことをされたじゃないか。それなのに、好きだって？！

しかし、彼が最も驚愕したのはそれに続く部分だった。

『…本当は、苛められるのがもう嫌だからとか、親が成績でうるさいからとかではありません。

君を好きになってしまったのが、もの凄く苦しいからです。

僕は君になぜか親近感を持っていました。

僕と似てるような気がして、せめて友達になれたらと思っています。した。

でも僕のような人間では、たぶん君に目もかけてもらえないでしょう。…』

横田は僕のために死んだと言うのか？

そして、居間のドアが開き、母親が入って来た。彼と母は無言のまま、ひきつった顔を見合わせていた。

「…見てしまったのね…」

母は、半世紀以上も前から平日の夜に放送されている主婦に大人気の二時間サスペンステレビドラマのような台詞を口にした。途端にこの場はそういう二時間ドラマになった。

「…どういことだよ」

彼は彼で混乱したまま反抗期真っ只中の息子に扮した。

「…ジョシュ、あなた、その横田くんと仲が良かったの？」

「…いいや」

母は永い溜息をつき冷静になろうとしながら言った。

「こんな手紙は来なかった事にするのよ、そんなあなた、そりゃあ人から好かれるのは悪いことじゃないけれど、男の子からで、しかもこんな風になって（つまり彼女は同性、しかも自殺した人間からと言いたかった）、ジョシュは悩むに決まってるでしょ？それにこれでああなたの将来が変な方向に行ったら、これからなんだから…」

「変な方向ってなんだよ？それで手紙を、俺に見つからないうちに捨てたんだな？昨日の電話、担任からだったんだろ、なんで言わなかったんだよ」

「お母さんが言わなくても、学校に行けば耳に入るでしょう？あなたはこんな事でいちいち左右されずにあなたの道を歩まなくちゃならないのよ」

ああ、そうか。自分たちの進んだレールを行けという事か。

彼の中にふつつと沸き上がるものがあった。

「それで俺はだんだん人間らしさが消えていくんだ、何も知らずに勉強ばかりして、最後には機械になっちゃうんだ!!」

彼は膝について床を殴った。殴りながら、なんて陳腐で滑稽な喜劇だと思った。

与えられた役割を演じるだけ。こんな茶番はもうごめんだ。

しかしそれよりも彼を苦しめた考えがあった。

そうなのだ。彼はあの、大嫌いな無機質の連中と同じようにあの転校生を痛めつけていた。けれど本当は、そのことが自分を痛めつけるように痛かった。

横田に憎悪の感情など抱いてはいなかった。傷つけたいとは露ほども思っちゃいなかったのだ。

あれは、もう一人の彼だったのかもしれない。横田は彼が押し殺そうとし隠し続けた、もう一人の自分だったのだ。

むしろ愛していたかもしれない、その透明なか細さ、消え入りそうな眼差しを。いや、きっとそれゆえの憎悪だったのではないだろうか。

いつも泣きそうな顔をして隅で蹲っていたのは《僕》だった！
それなのに横田は彼を好きだと書き遺して死んでしまった。

謝りたかった。友達としてやり直したかった。横田にこの気持ち
を伝えたかった。ギイの言う通りだ。死んだ奴ともう一回話すこと
なんて出来ない・・・。

そして彼は立ち上がり、手紙を引っ掴んでこの茶番から飛び出した。
た。

土曜日の午後だった。

6 (後書き)

この行は特にモロ『トーマの心臓』だと思っています。
シュレッダーにかけるなら最後まで見届けないと。

自分で書いておいてなんだけど、詰めが甘いですねこの母親。

気がつく、彼は休日にもかかわらず学校方面行きのシストラムに乗っていた。こんなところにまで習慣は人にしがみついてくる。

「突発的な家出」とでも言うのだろうか。こんなに感情が暴発するなんて事は初めてだった。これが限界、ということか。自嘲の笑いがこみあげる。

習慣に嫌気がさして次の駅で降りようとする、目の前に璋が立っていた。彼は驚いたまま固まり、璋は無表情で乗り込んできた。

「どうしたんだよ、一体」

彼はあまりの偶然に尋ねるのもやっとだった。

「オレはよくこうやってぶらぶらするんだよ、ジョシュこそどうした」

「…まあな」

横田からの手紙について、まだ言う気にはなれなかった。

彼等は少しのあいだ、黙っていた。

「吸うか」

璋が上着のポケットから煙草を取り出し、火を点けながら言った。かなり慣れているようだった。

「ああ」

彼は吸った事がなかったが、咄嗟に粹がって答えてしまった。

彼は何でもないのでのように煙草を銜え、璋から直接火をもらって吸い込んだ。その途端、流れ込んだ煙に彼は激しく噎せ、涙が出て頬を伝った。

「おいおい」

璋は苦笑した。彼は黙ったまま咳き込みながら涙を流し続けた。

その時、シストラムは再び停車し、璋が立ち上がったのに気づいて外を見ると、窓越しにギイが見えた。

今まで見たこともない翳った表情をしていたが、ドアが開いて彼

等に気づくとすぐいつものギイに戻って爽やかに笑った。

「どうしたんだよ、その血は」

璋が声を上げた。よく見ると上着の下のギイのTシャツには赤いものがどぎつく散っている。

「いやあ、これさつき鼻血出ちゃってさ、Tシャツ全部洗濯中だから。君たちこそどうしちゃってんの」

「ジョシュが煙草に噎せてやがんの」

璋が言った。

「ははっ、さては初体験だな、初・体・験」

わざと言葉を意味深に使うギイを、彼は咳き止んだ涙目で睨んだ。「じゃあお前吸ったことあるのかよ」

「いや、ないけど…、そうじゃない、この歳で普通に吸ってる璋のがおかしい」

「なんだと？」

璋が声を上げ、彼が笑い出すと二人も笑い出した。しかし彼のそれはすぐに消えてしまい、再び涙となって流れ出した。

そして彼は一息ついて言った。

「…手紙が来てたんだ、横田から」

笑い声は止んだ。

彼は手紙を二人に見せた。

「…俺のことを好きだって書いてあって、それがもの凄く苦しいから死ぬだなんていうんだ。俺はあんな事したっていうのに…」

そして彼は母親とのやりとりの事も話した。

「俺は、あいつの言うような優等生なんかじゃない、全部嘘なんだ、俺はほんとは何にも出来ない嘘吐きだ」

「どういう意味だ？」

璋が訊いた。

「俺は…兄弟の中で一番出来が悪くて、でも兄貴の参考書とか使ってたおかげでそこまで成績悪くなくて、でもこの学校受ける時、兄

貴も姉貴も行ったとこだから、絶対受からなきゃいけないって……
前の席のやつをカンニングしたんだ」

「そうなのか？」

ギイが目を丸くした。

「そうなんだ、そしたら一気に首席なんてことになって……、それでもあとは前と同じように要領だけで済んじやって……」

そして彼は泣きじゃくりながら、茫然としている二人の前で横田について話した。そんな弱い彼を、横田はきつとどこかで感じて、それを彼もどこかで感じていたんだということ。

だからこそ、横田が目の前にいることが許せなかったのだということ。鏡のように、彼の弱さを見せつけられることが。

「あいつは、もう一人の俺だったんだ、でも、俺が殺したんだ、きつと……」

二の句を遮ったギイが彼の顔を両手で包むように持ったまま、真直ぐな眼で言った。

「お前のせいじゃない、お前のせいじゃないよ、解るだろそれぐらい？ そんな風に思い込むな、お前のせいじゃないよ、絶対にそうだ。今ごろ悔やんだって仕方無いんだ。お前は傷つけたわけじゃないって、そう分かればいいんだ」

璋のはもつと強烈で、彼の掌から手紙を奪い、破り捨てた。

「この手紙に囚われるな。こいつは、お前に伝えたかったただけなんだから。何かしろなんて言ってないだろう？」

ギイも言った。

「そうだよ、お前のことを解っててくれたんだから、感謝するだけでいいんだ。だからほら、深呼吸して」

涙は止まっていた。

「やっぱりなあ」

ややあつてギイが言った。

「横田もきつとおれみたいな感じでお前が好きだったのかな。なんとなく分かる」

「どんな風にだよ？」

「なんか、お前って危なっかしくて…、気がつくとも目で追ってしまうタイプなんだよな」

「どこが？」

「ジョシュの場合は周りの空気が冷たくて、でもそれは必死に距離を置こうとしてるからってとことか、でもだから側に居てやらなきゃいけないような…、うん、確かにお前横田と似たところある」

「ほお」

璋がニヤニヤしながら笑った。

「愛されてんなあ、ジョシュ」

「茶化すなよ」

「でもこんな風に遺書に書いて遣されると、残された方はたまったもんじゃないよな」

ギイがこんなにも彼の事を観察しているのを知って彼は少々驚き、嬉しくもなった。

「横田のために、俺ができることってないかな」

「そりゃあ、ずっと憶えててやることじゃねえの、あいつのこと」

璋が言った。ギイも頷いた。

彼等はシストラムの窓を開け、言葉を破れた紙片と一緒に放った。

「よこたのおおばかやろう、わすれねえぞ！さんきゅー！」

忘れねえぞ、もう一人の僕。幸せに、旅立てるように。

いつかまた、還ってこれるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6578x/>

だれもないまひるのゆうえんち

2011年10月26日07時09分発行